

「向こうに行く前にしたいこと」

広瀬絵理

登場人物

大葉邦宏 (40) 中学校教諭

大葉陽子 (43) 邦宏の妻。保育士

山口七海 (13) 邦宏のクラスの生徒

近藤里奈 (24) 邦宏の同僚。中学校教諭

宮川健一 (40) 邦宏の友達。探偵

岡田鉦 (28) 邦宏の同僚。中学校教諭

山口拓海 (4) 七海の弟

医師

コンビニの店長

居酒屋の店員

保育士

生徒 A

生徒 B

あらずじ  
邦宏は里奈と浮気をしているが、妻の陽子とも別れる気がない自分勝手な男。ある日、生徒の七海が万引きをした為店に謝りに行くことになる。その道中、ラブホテルに入っていくカップルを見かける。女性が陽子に似ているように感じた邦宏は、友達で探偵業の宮川に相談をする。浮気のチェック方法を教えてもらい、調べてみると不安は的中。浮気相手を探す為、陽子の勤務先に行くと1カ月も前に辞めていたことが分かる。手に余り宮川に浮気調査を依頼する。早速デート現場を押さえることに成功するが、デート中、陽子は血を吐いて倒れる。陽子が癌で余命いくばくもないことが判明する。全く知らなかった邦宏は、主治医から「治療の副作用で苦しむよりも、身体が自由がきくうちにしたいことをしたい」と緩和治療を受けていたことを知らされる。邦宏は「したいこと」浮気」が許せない。陽子は邦宏の浮気を知っており、自分も最後に恋をしたかったと言う。口汚く罵りあう二人。邦宏は病室を出ていってしまう。一夜明けて戻ってみると陽子は危篤。そのまま帰らぬ人に…。

淡々と葬儀を執り行う邦宏は、陽子との最後の思い出がひど過ぎて泣くことが出来ず、冷めた気持ちでいた。家に戻ると、玄関の前で七海が待っていた。七海は生前仲良くしており、陽子の浮気は全部嘘だと言う。渡された陽子の日記を読むと「私が向こうにいく前にしたいこと。それは、邦宏さんにちゃんと嫌われて、忘れてもらうこと」陽子は自分の死

後、邦宏が気兼ねなく里奈と再婚出来るように浮気のふりをしていたのだった。陽子の深い愛を知って涙が止まらない邦宏。陽子に恥じない生き方をしようと改心し、里奈と別れる。

実はこれこそが陽子の本当の狙いだった。「私が向こうにいく前にしたいことは、私のことを忘れさせないこと。里奈と幸せになるなんて絶対許せない」何も知らない邦宏は、陽子の思惑通りに、生涯陽子のことを生きていくのだった。

タイトル「向こうに行く前にしたいこと」

○ラブホテル街

スマホ片手に歩く、岡田鉦（28）。

それに続く大葉邦宏（40）。

岡田「それしにしても何で山口が。それもこんな場所です」

邦宏「さあな」

岡田「だって山口って真面目な方ですよ。」

印象は薄いですけど」

邦宏「今まで問題行動もないからな」

岡田「やっぱり父子家庭で愛情が足りてないんですかね」

邦宏「一概には言えんよ。決めつけはよくないぞ」

岡田「だってまたこの場所が：援助交際とかしてないですよ」

邦宏「そこまじやないだろう。思春期の万引きは風邪みたいなもんだ」

岡田「え」

邦宏「誰でも一度はかかる」

ホテルに入って行く男女が見える。

岡田「羨ましいっすね、昼間から」

邦宏、ホテルに入って行く男女を見る。

邦宏「（！）陽子：？」

邦宏、思わず追いかけてしようとする。

岡田「大葉先生、そっちじゃないですよ。こ  
っちです」

邦宏「：：：」

岡田「大葉先生？」

邦宏「ああ。（ホテルを見て）まさかな」

邦宏、岡田に駆け寄る。

○コンビニ前／店内レジ前

岡田、スマホの地図を見ながら、

岡田「ここだ」

コンビニを見上げる邦宏と岡田。

店内へ入る。レジにいる店員。

岡田「すみません。若生中学の者です」

○同・店内事務所

奥の椅子に座っている、制服姿の山口  
七海（13）。

店長に頭を下げている邦宏と岡田。

邦宏「申し訳ございませんでした」

店長「反省の一言もないんだから。保護者には連絡つかないし」

邦宏「すみません。うちで対処しますので」

店長「先生からよく言い聞かせてよ」

邦宏「はい、それはもう。本当にすみません  
でした」

七海、頭を下げる邦宏を、覚めた目で  
見ている。

○同・外

店長に頭を下げている岡田、邦宏。  
棒立ちの七海。

邦宏「山口」

邦宏、七海に頭を下げさせる。

店長「次はないからね」

七海「…はい」

邦宏「それでは失礼します」

歩き出す、邦宏、岡田、七海。

岡田「山口、どうして万引きなんて」

七海「…:…:」

岡田「何か理由があるんだろう。先生に言うてみる」

七海「…別に」

岡田「別についてな」

邦宏「岡田先生。(七海に)無理に言わなくていいから。ただもう万引きはするな」

七海「…」

邦宏「今回お父さんには言わないけど、次はお父さんに話すからな」

岡田「大葉先生」

邦宏「いいじゃないですか。ここは山口を信じてやりましょうよ。間違いを起こさないよう、大人が見守ってあげればいいんです」

岡田「そうですけど…」

邦宏「な、もうしないな、山口」



七海「…はい」

七海、鞆をぎゅっと握る。

邦宏「分かっているよ、お前も色々あるんだろ  
う。大丈夫、先生は分かっているから。だから何かあったら相談しろよ」

七海「…:…:…」

満足げな笑顔の邦宏。

○大葉家・外観（夜）

郊外の一軒家。小さい庭がある。

○同・リビングダイニング（夜）

キレイに整頓された部屋。

カレンダーに、邦宏と陽子の、仕事な  
どのスケジュールが書かれている。

帰ってくる邦宏。

邦宏「ただいま…。陽子？」

ソファにピンクのジャケットがかけて  
ある。思わず手に取る。昼間、ラブホ  
テルに入っていた女性と同じ？

邦宏、カレンダーを見る。

邦宏「……」

部屋に入って来る大葉陽子（43）。

邦宏、慌ててジャケットを元に戻す。

陽子「あれ、帰ってたの？珍しい。今日は早いのね」

邦宏「ただいま」

陽子「ご飯の支度今からなんだけど、待てる？」

邦宏「ああ」

陽子、エプロンをつけて台所へ入る。

その様子を見ている邦宏。

邦宏「陽子、今日何してた昼間？」

陽子「保育園。仕事に決まってるじゃない」

邦宏「だよな」

陽子「どうして？」

邦宏「昼間、陽子に似た人見かけてさ」

陽子「へくそう。世の中には似てる人が3人いるって言うから」

安心した邦宏、着替えに部屋を出る。

その隙に陽子、ジャケットを隠す。

それを見てしまう邦宏。

邦宏「……………」

○若生中学・外観

○同・職員室

自席で考え事をしている邦宏。

近藤里奈（24）、邦宏に近付き、

里奈「大葉先生、ちょっといいですか。山口

さんのことで」

大葉「はい」

邦宏、席を立つ。

○同・進路相談室

椅子と机がある小さな部屋。

先に中へ入る里奈。後に続く邦宏。

邦宏がドアを閉め切る前に、抱きつく

里奈。

邦宏「わあ」

邦宏、慌てて閉める。

邦宏「何だか積極的だね、この頃」

里奈「どうして私を連れてってくれなかったんですかぁ」

邦宏「だってあれは生活指導と一緒にって、校長が」

里奈「私、副担任なんですよ？」

邦宏「行かなくてよかったよ。ただひたすら謝るだけなんだから」

邦宏、里奈を引きはがす。

里奈「この頃、私と一緒にいるの、避けてない？」

邦宏「どうして？避けてない避けてない」

里奈「じゃ、今夜。うちに来て」

邦宏「今日？」

里奈「ダメ？」

邦宏「ダメじゃないけど…」

里奈「…何よ、もう」

里奈、邦宏をつねる。

邦宏「痛いって。…いや色々さ、考えなきや

いけないことがあるから」

里奈「山口さんのこと？」

邦宏「担任として、何か出来ることあると思  
って」

邦宏、真面目な顔をする。

里奈「……素敵。やっぱりかっこいい」

邦宏「やっぱり？」

里奈「教師としての邦さん尊敬してるんだも  
ん。いつも熱心で、生徒思いで」

邦宏「当たり前のこと言うなよ」

里奈「ねえ私が邦さんを癒してあげる。たま  
には真面目な先生の仮面を外して、ね」

里奈、邦宏にキスをする。されるが  
ままの邦宏。

邦宏「……ま、いつか」

邦宏、キスを受け入れる。

○同・廊下

邦宏、携帯でメールを作っている。

『今夜、問題の生徒宅を訪ねることに

なりました。遅くなるので食事はいり  
ません：』

邦宏、操作の手を止める。

昨日見たカレンダーを思い出している。

今日、陽子の仕事は休みになっていた。

メールをやめて、自宅に電話する。

× × ×

自宅。

誰もいない。電話が鳴り響く。

× × ×

中学校の廊下。

邦宏、諦めて携帯を切る。

邦宏「……」

正面に七海。邦宏をじっと見ている。

邦宏「（！）山口。…どうした」

七海「口」

邦宏「え」

七海、自分の口を軽く叩く。

邦宏、廊下に貼ってある鏡を探して顔  
を見る。口紅が付いてる。慌てて拭う。

七海、そんな邦宏の後ろを通り過ぎる。

邦宏、七海の方に振り返り、

邦宏「いや、あのこれは違うんだ」

足を止める七海。

邦宏「さっきぶつかっちゃったから、それでついたのかな。いや、そんなこともあるんだなあ」

七海「大丈夫言いませんから。昨日の借り」

邦宏「だから違うって、勘違いするな」

七海「…詰めが甘いですね、先生」

邦宏「え」

七海「よくそれで奥さんにバレませんね、浮気」

邦宏「う、浮気なんて…」

七海「よっぽど先生に興味がないのか。もし

くは…：奥さんも浮気してるのか」

邦宏「…：…」

七海「大人は大変ですね」

○居酒屋・店内（夜）

大衆居酒屋。カウンターに座る邦宏と、  
宮川健一（40）。

店員、カウンターの中から生ビールを  
出す。

店員「はい、お待ち〜」

邦宏、宮川生ビールを持ち上げ。

宮川「お疲れ〜」

邦宏、宮川グラスをカチンと鳴らし、  
ビールを呑む。

宮川「あ〜」

宮川、美味しそうに喉をならす。

邦宏、ため息。

宮川「で、何？相談って」

邦宏「うん…」

宮川「例のやっかいな子？どーせ面倒になっ  
てきたんだらう。だから浮気はやめておけ  
って」

邦宏「そっちじゃないんだ」

宮川「…また増やしたの？懲りない奴だなあ。  
いつか痛い目みるぞ」



邦宏「もう増やしてないって。：陽子のこと  
なんだけど」

宮川「陽子ちゃん？」

邦宏「：浮気してるかもしれないんだ」

宮川「あの陽子ちゃんが？ないない」

邦宏「俺も最初はそう思ったんだよ、浮気出  
来るタイプじゃないって。そもそも男に相  
手にされないだろうし」

宮川「言うね〜。お前と違って善人なんだよ、  
陽子ちゃんは」

邦宏「俺を悪人みたいに言うなよ」  
しゅんとしている邦宏。

宮川「：落ち込むな」

邦宏「：：：」

宮川「嫌なの？陽子ちゃんの浮気」

邦宏「そりゃ嫌だよ。許せないだろう」

宮川「おっ、自分のこと棚に上げたな」

邦宏「俺とあいつじゃ、違うんだよ。俺は男  
だから」

宮川「別に責めてないって。ただ、冷めてる

のかなって思ってたから、意外だったんだよ。やきもちやくなんて」

邦宏「やきもちやくなんて…そんな簡単な気持ちじゃないんだよ」

宮川「所有物が取られちゃった悔しさ？みたいな感じ？」

邦宏「…：…：」

宮川「で、何か証拠あるの」

邦宏「これっていう決定的なのは…」

宮川「調べろって言うならうちで引き受けるけど、友達価格にしてやるよ」

邦宏「いや、いい。大げさにはしたくないんだ」

宮川「…：…：」

邦宏「宮川に相談するなんてどうかしてた。ちよっと動揺したただけだ、うん、そう。大丈夫、多分、俺の勘違いだ」

宮川「…そんなに気になるなら、調べてみたら自分で」

邦宏「え…？」

○大葉家・寝室（夜）

家着の邦宏。クローゼットを開ける。

洋服をあさる。

宮川の声「クローゼットを見てみる。新しい服が増えてたり、趣味が変わってないか確認してみる」

邦宏「…これ前から持ってたのか？…趣味変わったのか？分かんねーよ」

邦宏、引き出しをあさる。

宮川の声「続いて引き出し。新しくて、セクシーな下着が増えてないかチェック」

邦宏、下着を見るも、変化は分からない。  
い。

奥の方に総レースの下着。邦宏、それを持ち上げる。

邦宏「…こんなのいつはくんだ」

近づく足音。邦宏、慌てて仕舞う。

風呂上がりの陽子が入って来る。

陽子「…どうしたの？」

邦宏「何でもない」

陽子「お風呂、お先でした」

陽子、鏡台に座る。その時に、ポケットから携帯を出し、台の上へ置く。

邦宏「……」

邦宏、それを眺めている。

陽子「どうしたの？」

邦宏「…風呂入ってくるわ」

陽子「出る時、換気扇忘れないでね。私、先に寝るから」

邦宏、部屋を出て行く。

○同・廊下↓階段

邦宏、階段を降りていく。

足を止めて、口に手をあてる。

邦宏「……」

宮川の言葉を思い出す。

× × ×

(回想) 居酒屋

カウンターに座る宮川。

宮川「あと携帯。お前も経験者だから分かる

と思うけど、風呂でもトイレでも、家の中、  
携帯持ち歩くようになったらクロだ。あの  
小さな機械に、沢山の証拠が詰まってるか  
らな」

× × ×

自宅。階段下。

邦宏、壁を叩く。

邦宏「くそ」

○同・リビングダイニング（朝）

陽子、観葉植物の世話をしている。

邦宏、新聞を読んでいる。

キッチンの隅で、充電器にささったま

まの、陽子の携帯がある。

邦宏、それを目で追っている。

洗濯機の仕上がりを教える音が鳴る。

陽子、廊下奥にある洗濯機の所へ。

邦宏、陽子がいなくなったのを確認し、  
携帯を手に取る。ロックがかかって  
いる。

邦宏「陽子の誕生日」

はじかれるパスワード。次々と試して  
いく。

邦宏「俺の誕生日：家の電話：番地：携帯？

：結婚記念日」

全部はじかれる。メールを受信する。

その音とバイブに驚く。

邦宏「うああ。……ぐっさん？」

『差出人　ぐっさん』

と表示され、文章の最初の方が少し表  
示される。

『この間ありがとう。楽しかった

（ハートの記号）それで…』

邦宏「ハート？楽しかった？！何だよこの  
間って」

先を読もうとしてパスワードを試す。

邦宏「えーっと、あと何がある？…（！）郵

便番号：違うか」

陽子「何やってるの？」

邦宏、後ろを振り返ると、陽子。

陽子「携帯、私の…」

邦宏、陽子の携帯を持ったまま。慌てて言い訳をする。

邦宏「チカチカ光ってたから、壊れてるんじゃないかと思つて。充電ダメなんじゃない？」

い？」

陽子「寿命かなあ。もう2年だし」

邦宏「早目に修理出した方がいいぞ」

陽子「うん。そうする。ありがとう」

陽子、携帯をエプロンのポケットに入れる。

邦宏の携帯が鳴る。近藤先生と表示されている。

邦宏、携帯を指して、

邦宏「ごめん、学校から」

邦宏、書齋へ行く。

○同・書齋

邦宏、部屋に入り、携帯に出る。

邦宏「もしもし」

里奈の声「今、何してました？」

邦宏「何って、とくに何も。あの、先生、休日の電話はちよつと」

○里奈の車・車内

路地に止まってる車。

里奈、運転席に座って、携帯で話している。

里奈「何もしてないなら、今からちよつと出ませんかあ？」

邦宏の声「会いたいののは山々なんだけど、さすがに無理だよ」

里奈「ね、窓の外、見て。見て、見て」

× × ×

邦宏「えっ…あ！」

近くに止まっている里奈の車。笑顔で大きく手を振っている。

邦宏「ちよ、急に家は困るよ」

里奈の声「だって会いたくなっちゃったんだもん。この間、来てくれなかったから、私



から来ちゃった」

邦宏「来ちゃったって、かわいく言ってもダメ。もうくこま（困る）…何で住所知ってるの？」

× × ×

里奈「職員名簿。副担だから緊急時のことを  
思って事前に調べておいたの。役にたった  
あゝ」

邦宏の声「…なるほど」

里奈「お宅訪問してもいいけど？」

× × ×

邦宏「…どこに行きましようか」

○同・リビングダイニング

邦宏、私服に着替えて部屋に入って来る。

陽子、お裁縫をしている。

陽子「出かけるの？」

邦宏「ちよつと岡田先生に呼び出されてさ。

あゝ生活指導の生徒のこと」

陽子「休日まで大変ね」

お裁縫している陽子を見る邦宏。

邦宏「…化粧品変えた？」

陽子「別に変えてないけど。何で？」

邦宏「何かキレイだなんて」

陽子「（笑って）もうそんなおべんちゃら  
いいから、気にせず行って来て。お仕事な  
んだから」

陽子、褒められて嬉しい。

邦宏「夕方までには戻るから、たまには夕飯  
外に食べに行こう」

陽子「分かった。私もそれまでにこれ仕上げ  
ちやおうつと」

邦宏「何、園の仕事？お前パートなんだから、  
家に持ち帰ってまで…」

陽子「分かっています。これは個人的に、お手  
伝いしてるの」

邦宏「個人的？」

陽子「父子家庭の子がいてね。さすがにお父  
さんに縫い物は…。お遊戯会もうすぐだし、

内緒でお手伝いしてるの」

邦宏「問題ならぬか、それ」

陽子「…かも、しれないけど、たっくんがか  
わいそうで。子供には罪ないでしょ」

邦宏「まあそうだけど」

陽子「大丈夫よ。こっそり作って、そつと渡  
すから」

邦宏「ふくん。あまり個人的に仲良くするな  
よ。父子家庭って変に勘ぐられても困る…、  
(！) あっ」

陽子「え？」

邦宏「あ、いや、何でもない」

陽子「????どうしたの？」

邦宏「でかけてくる」

陽子「行ってらっしゃい」

邦宏、部屋を出る。

○里奈の車・車内

里奈、運転している。

邦宏、深く座っている。

里奈「ドライブデートしてみたかったんだ」

邦宏「……」

里奈「ね、」

邦宏「……」

里奈「ね、もう、機嫌悪いのやだあ」

邦宏「ああ、本当はこんなことしてる場合じゃないんだっ！」

邦宏、頭をかきむしる。

里奈「え：こわくい」

邦宏「ごめん、つい」

里奈「何よ、こんなことって。ひどい」

邦宏「ああ、そうじゃないんだよ。デートは楽しいんだよ。ただ考え事してて」

里奈「考えてばかり、この頃」

邦宏「うん：この仕事してるとな：、あ！」  
信号待ちしている車。その先を歩いて  
いる七海と、山口拓海（4）。  
邦宏、さらに深く座る。

里奈「何？どうしたの？」

邦宏「山口。ほら前」

里奈「あく本当だ。…弟と一緒になんですわね」

邦宏「あんま見ちゃ、気付かれる」

里奈「分からないよ」

信号が変わって車を出す。すれ違う。

里奈「偉いなく弟くんの面倒みて」

邦宏「山口ってどんな子？」

里奈「え？」

邦宏「いや、近藤先生から見てどんな子に見える？」

里奈「もう二人の時に近藤先生って…、あ、私を副担として試してる？」

邦宏「女性同士話すこともあるだろう。嗜好きかな。それとも口が固いタイプ？」

里奈「そうですね、友達を作らず、部活にも入らず、孤独な感じはしますね。話しかけてもあまり答えませんし。口は堅いんじゃないですか」

邦宏「…：…」

里奈「山口さん、そんなに気になりますか？何かあったんですか」

邦宏「山口の言葉を信じていいものか迷って  
るんだ：」

里奈「生徒を信用するのが大葉先生の信条で  
しよ。弱気になってどうするの」

里奈、邦宏を叩く。

邦宏「そうなんだけど、こればかりはな：」

邦宏、頭を抱えてもっと深く座る。

邦宏「生徒はこんな遠くまで来るのか、気を  
付けないとな：」

○ファーストフード・店内

座っている陽子、七海、拓海。ジュ  
スを飲んでいる。

陽子、袋を渡す。

陽子「はい、これ」

拓海「ありがとう」

袋から中身を出す。陽子が作っていた  
お遊戯会の衣装。

七海「わあ、かわいい」

拓海、自分の身体にあてがっている。

喜んでる拓海を愛おしげに見る陽子と

七海。

陽子「サイズ、大丈夫だとは思うんだけど、家に帰ったら確認してね」

七海「いつもありがとうございます」

七海と拓海、ぺこっとお辞儀。

陽子「いいのいいの、好きで作ってるんだから。あと、これ」

陽子、タッパに入ったお弁当を出す。

七海・拓海「わあ〜！」

陽子「ハンバーグ、筑前煮、ひじきの煮物、きんぴら、切り干し大根。ハンバーグ、3日分あるから、食べない分はすぐ冷凍してね。お惣菜は冷蔵庫に入れて一週間ぐらいだから」

拓海「好きハンバーグ」

七海「陽子先生のきんぴら美味しいんだよね」

あ

陽子「七海ちゃんって渋いよね、好み」

七海「だって本当に美味しいんだもん。他の

と違うんだよね」

陽子「こんなんでよければいつでも作ってあげる！って言いたいところだけど、それも難しいので、はい、これ」

陽子、ノートを出す。

陽子「レシピ書いてきた。これを参考にたっくんに作ってあげて」

七海「無理だよ。出来ない」

陽子「教えられるうちに教えるから。頑張ってみよう」

七海「…うん」

陽子「嬉しいんだ。七海ちゃんが私の味を覚えてくれたら…母から子へ伝えるみたい」

七海「うん」

穏やかに笑う陽子。

七海「陽子先生、今日なんだか楽しそう」

陽子「ふふふ、分かる？」

七海「うまくいってるんだ」

陽子「そーなの！こんなにうまくいくと思わなかったから。順調そのもの」



七海「よかった〜」

陽子「ごめんね：七海ちゃん」

七海「またすぐ謝る。これからなんだよ。し  
っかりして」

陽子「はい」

○若生中学校・外観

○同・職員室

邦宏、自席にてノートに書き込み。

『問題点』と項目がある。

その下に『陽子の例の件』『K先生』

『Y生徒』と書いてあり、さらにその

周りにコメントが書いてある。

Y生徒のところには、

『信用していいのか？変な噂になった  
ら？』

K先生のところには、

『この頃、やけに積極的』『潮時？』  
陽子のところには、

『ピンクのジャケット』『携帯』『ぐ

っさんは…』

と書いてあり、そこに追記して、

『園に通う、保護者？父子家庭…』

と書く。

岡田「はい、先生」

岡田、邦宏の机に、コーヒーカップを置く。

邦宏「あ、ありがとう」

岡田「さつきから熱心にやっていますね」

邦宏「ああ、ええ」

岡田「教案ですか？」

邦宏「そうなんだよ。新しいね、何かもつと生徒が興味持ってくれるような授業出来ないかと思って、練ってたんだ」

岡田「僕、大葉先生の教案、いつもいいなって思ってたんですよ。一度見せて貰えないですかネタ帳」

岡田、ノートをとろうとする。

邦宏、慌てて隠す。

邦宏「ばっ、バカヤロウおく。企業秘密だよ。  
自分で考えろ。若いうちは買ってでも苦勞  
しろ」

岡田「えー若手を育てると思って」

岡田、ノートをとろうとする。

邦宏「まずは自分でなんとかしろって。それ  
でも困った時は相談にのるから」

岡田「分かりました。今度、相談にのって下  
さいよ」

邦宏「ああ」

岡田が諦めて去っていく。邦宏、その  
後ろ姿を見送る。

邦宏「ここじゃダメだ、落ち着かない…」

壁の時計を見ると、17時近く。  
ノートの目を落とす。

『園に通う、保護者？父子家庭…』

邦宏「…行動あるのみだ」

鞆を持って、席を立つ。

○みどり保育園・外観

園庭で遊ぶ園児。お迎えに来ている保護者などで賑わっている。

○同・門の外

邦宏、身をひそめて陽子を探している。

邦宏「パンダ組だったよな…」

1階にある、パンダ組の教室を見つける。目を凝らすも、陽子はいない。保護者に対応しているのは、他の保育士ばかり。

邦宏「…いないな」

保育士「あの…」

邦宏の背中に声をかける保育士。

邦宏「（！）はい」

保育士「通報しますよ！」

保育士、持っていた竹箒で邦宏を突く。

邦宏「違います、違います。あの、ここで働いている大葉陽子の夫です」

保育士「陽子先生の？」

邦宏「すみません。突然伺って。陽子、いま

すか？」

× × ×

邦宏「え？！辞めた？」

保育士「本当残念だったんですけど、皆に慕われてましたから」

邦宏「あ、あのいつですか」

保育士「もう一か月になるかしら。：一身上の都合って仰ってましたけど：ご主人はご存じなかったんですか？」

邦宏「あ、はっはははは。陽子のやつ、俺に言いつらかったのかな。いや、私仕事が忙しいものですから、気をつかってくれたのかもしれない」

保育士「はあ」

邦宏「なんだあいつ、あっははは、本当すみません。お騒がせしました」

邦宏、逃げるように帰る。

○徳福探偵事務所・外観（夕）

古い雑居ビル。

徳福探偵事務所の看板が出ている。

邦宏、看板を見上げている。

○同・事務所内（夕）

6 個程の机と、小さな応接室のある事務所。数人働いている。

邦宏、扉を開けて入って来る。

邦宏を見つける宮川。

宮川「大葉……」

疲れ切った顔の邦宏。

○同・応接室（夕）

机を挟んで向かいあって座っている邦

宏と宮川。

宮川「……なるほどね。よくそこまで調べたな」

邦宏「……」

宮川「で、どうするの？うちに正式に依頼でいいのか。証拠が必要ならちゃんと押さえるぞ」

邦宏「……」

宮川「離婚を有利に進めるなら証拠は押さえ  
たほうがいい。ましてやお前の方だって浮  
気してて不利なんだから……。大葉？大葉、  
聞ってるのか」

邦宏「…俺、離婚したいのかな」

宮川「……」

邦宏「どんな顔して家に帰ったらいいか分か  
らないんだ…」

宮川「……」

宮川、席を立つ。

宮川「ちよつと付き合え」

○居酒屋・店内（夜）

大衆居酒屋。

カウンターに座る宮川と邦宏。

店員、カウンターの中から生ビールを

出す。

店員「はい、お待ち」

邦宏、宮川生ビールを持ち上げ。

宮川「お疲れ」

宮川、邦宏のグラスをカチンと鳴らし、  
ビールを呑む。

宮川「あゝ」

宮川、美味しそうに喉をならす。

邦宏、呑まずに泡を見つめている。

宮川「ショックなのか？」

邦宏「そりやショックだよ……」

宮川「お前なりに愛してるんだ、陽子ちゃん  
のこと」

邦宏「やっぱり陽子は浮気しちゃダメだよ」

宮川「自分は浮気……」

邦宏「（遮って）そうだよ、浮気していいの  
は俺だけ。男だから、俺は。やっぱり女性

は浮気しちゃダメ」

宮川「よく分からん理屈だな。まあ分からな  
いでもないけど」

邦宏「だろう」

宮川「じゃ離婚するのか？」

邦宏「……」

宮川「離婚すれば、今浮気してる子と堂々と



付き合えるようになるぞ」

邦宏「俺もそれちよつと思った。これで変な煩わしさはなくなるなって。でも俺、里奈と結婚する気ないんだよ。だからわざわざ陽子と離婚しなくても……。バランス崩したくないんだ、今の」

宮川「何だよそれ、勝手だな」

邦宏「俺は恋をしたいだけなんだ。二人とも大切なんだ」

宮川「お前みたいなのは結婚しちゃダメだよ。向いてない」

邦宏「俺もそう思う」

宮川「じゃ陽子ちゃんのこととは黙認するのか」

邦宏「……かと言って許せない俺もいるんだよ」

宮川「お前な……」

邦宏、ビールを呑む。

宮川「子供いないんだから、別れた方がお互いのためだろう」

邦宏「……子供かぁ。子供がいたら違ってただろうな……」

宮川「不妊治療してたんだろう？もういいの  
か」

邦宏「もう年齢が年齢だし、うちは諦めたん  
だ。限界だったんだよ」

宮川「陽子ちゃん、子供が好きなのに皮肉な  
もんだな」

邦宏「俺だって辛かったんだぞ。陽子があと  
3歳若かったらって。姉さん女房の弊害だ  
よ」

宮川「俺時々、何でお前と友達やってるんだ  
ろうって思うよ」

邦宏「何だよ。宮川だから素直な気持ちと言  
ってるんだろう」

宮川「それ陽子ちゃんに言ってないだろうな」  
邦宏「言う訳ないだろう。思っても言えな

いよ」

宮川「態度に出やすいんだから気を付けろよ」  
邦宏「そこまで間抜けじゃないって」

宮川「間抜けだから言ってるの。無自覚な男  
だなく」

邦宏、ビールをぐびっと呑む。

邦宏「…調査、頼む」

宮川「してどうする」

邦宏「どうするかは…まだ分からん。でも相手は知っておきたい。その先のことは、それから考える」

宮川「わかった。数週間で結果出ると思う」  
黙ってビールを呑む、邦宏。

○宮川の車・車内

大葉家が見える場所に止まってる車。

車内からカメラを構えている宮川。

陽子が出て来る。

宮川「お出掛けですね。…恋する乙女はキレイになるって本当なんだな…」

陽子、徒歩でそのまま駅に向かう。

宮川、車から出て後を付ける。

× × ×

陽子、カフェに入る。先に席に座っていた男性に駆け寄る。

○カフェ・店内

程よく混んでいる店内。

宮川、陽子と男性が座っている席の死角に陣取る。隠しカメラで撮影する。

陽子と男性は楽しそうに話している。

手を握ったり、見つめ合ったり、髪や頬を触る。

宮川「恋だねえ、青春だねえ」

× × ×

店を出る二人。手を繋いで歩いて行く。

○駅前路上

別れ際、抱き合う陽子と男性。別れを惜しんでいる。

宮川「おっ今日はこれで解散か？」

男性は陽子のおでこにキス。別方向へ歩き出す男性。お互い、バイバイと手を振る。陽子は別方向へ歩き出す。

宮川「相手を突き止めるか」

宮川、迷ったあげく、男性の後をつけ

る。すると後ろから小さな悲鳴。振り返る宮川。

宮川「陽子ちゃん？！」

陽子、道に倒れている。その近くで女性が見て、介抱もせずオロオロしている。

宮川「…くそっ」

宮川、陽子に駆け寄る。

陽子、口から血を吐いている。

宮川「陽子ちゃん！」

陽子「…宮川くん？」

宮川「今助けを呼ぶから」

介抱しながら、救急に電話をする宮川。

宮川「しっかりしろ、大丈夫だから」

陽子「…とう、とうまち：東町総合病院にお

願い…」

陽子、宮川の腕の中で、気を失う。

宮川「陽子ちゃん！」

鳴り響く、救急車のサイレン。

○東町総合病院・救急の入り口く院内

救急車が入口に付ける。ストレッチャーで運ばれる陽子。その後について降りる宮川。服に陽子の血が付いている。足が竦んでそれ以上動けない。運ばれていく陽子を入口で、呆然と見送る。

#### ○若生中学校・教室

邦宏、授業をしている。

生徒の中に七海。

邦宏、ポケットの携帯が振動している。携帯を見ると、『宮川からの電話』と表示。

生徒A「いけないんだ〜授業中に電話！」

邦宏「悪い」

邦宏、携帯を切る。すると、またすぐ宮川からかっかってくる。

生徒B「先生だからっていいんですか」

邦宏「ごめん、家族からの急用かもしれないんだ。坂田、55ページから読んでくれ。皆、静かにしてろ。すぐ戻るから」

邦宏、廊下に出る。

七海、不安そうに邦宏を目で追う。

○同・廊下

邦宏、携帯にでる。

邦宏「もしもし、今授業中なんだぞ」

宮川の声「すぐに出ろよ」

邦宏「出れる訳ないだろう。後でかけ直すから」

宮川の声「陽子ちゃんが倒れた」

邦宏「…え？」

○東町総合病院・携帯を使っているエリア

宮川、携帯で話している。

宮川「東町総合病院だ」

邦宏の声「何言ってる…」

宮川「血を吐いて倒れたんだよ。すぐ来い」

○同・廊下

邦宏、携帯を持った手をだらんと下ろ

す。立ち尽くす。

○東町総合病院・病室・個室

陽子、点滴などの機械に繋がれてベッドで眠っている。

○若生中学校・廊下

七海、手元には日記。曇り空を見上げている。雨が降り出す。日記を持つ手に力が入る。

○東町総合病院・診察室

医師から説明を受けている邦宏。付き添っている宮川。

邦宏「末期ガン……？」

医師「乳癌からリンパ節に転移して。こちらを受診された時にはもう全身に……」

邦宏「そんな……。治療は？治療すれば治るんですよね？」

医師「……残念ですが。今出来るのは、痛みを



和らげる緩和ケアになります」

邦宏「積極的に治療しないってことですか」

医師「ご本人がそれを望んでいるんです」

邦宏「陽子がそんな…そんなこと望むわけがない」

邦宏、拳を強く握る。

医師「大葉さん、辛いでしょうが受け入れてあげて下さい。奥さんの方がもっと辛いんですよ」

邦宏「……………」

○同・廊下

邦宏、宮川、診察室から出て来る。

廊下を歩く、陽子の病室へ。

医師の声「抗がん剤が始まれば、つらい副作用との戦いが始まります。そうまでして残りの時間を延ばすよりも、身体が自由がきくうちに、したいことをやりたいって」

陽子の病室前。

邦宏、扉を開けようと手を伸ばすが、

手が止まる。

医師の声「主人と相談してそう決めたんです  
って、いい笑顔で仰って。……ご存じでな  
かったんですね。」

邦宏、扉を叩く。

宮川、邦宏の肩を叩き、外へと誘う。

○同・休憩室

邦宏、宮川、ベンチに座って缶コーヒ  
ーを飲んでいる。

邦宏「……」

宮川「……」

沈黙が続く。

邦宏「俺、必要な物、家に取りに帰るわ。戻  
るまでここにいてくれないか」

宮川「ああ」

邦宏、缶コーヒーを捨てる。

○同・外観（夜）

○同・病室・個室（夜）

陽子、少し身体を起こしている。宮川と小さな声で話している。

邦宏、荷物を持って入って来る。

邦宏「大丈夫なのか？身体起こして」

陽子「大丈夫。今、気分いいの」

邦宏「取りあえず、持って来たけど…」

邦宏、荷物からパジャマなど出す。

陽子「えく何でそのパジャマ？もつと新しくてキレイなのあったでしょ。用意しておいたのに」

邦宏「…用意してあったって。そんなの分からないよ」

陽子「よく見ないからよ。私入院セット作っておいといたの。どうせならコットンで肌触りのいいの、着たいでしょ、最後は」

邦宏「…何だよ最後って！」

邦宏、怒鳴る。

陽子「ちよつと声大きい」

邦宏「どうして俺に相談しなかったんだよ！」

陽子「相談しようと思ったわよ。でも相談したところでどうにもならないでしょう。治る訳じゃないんだから」

邦宏「それはあれか、最後にしたいことをするためか」

宮川「大葉」

邦宏「最後にしたいことしたいって、それで浮気って、何だよそれ！」

陽子「…だから宮川くんなんだ」

宮川「ごめん…」

邦宏「夫婦だろう。何でこんな大事なこと話してくれなかったんだ！俺達一体なんだよ」

陽子「…恋がしたかった、最後にときめきたかったの、あなたみたいに」

邦宏「え」

陽子「知ってるの、あなたが浮気してること」

邦宏「な、何言ってるんだ」

陽子「何が夫婦よ…！私が病気で辛い時、あなた女に会いに行ってたじゃない」

邦宏「…」

陽子「私が病気だったこと、全然気付かなか  
ったでしょ。私半年で10キロ痩せたの  
よ？」

邦宏「いや、キレイになったって思ってたよ」  
陽子「バカじゃないの！何が夫婦よ。あなた  
は私のことなんてちっとも見てくれなかつ  
た」

邦宏「俺なりにお前のこと思ってるんだ」

陽子「下半身でしか考えられないくせに。こ  
の浮気男！副担の女のどこがいいのよ！若  
いだけでしょ」

邦宏「お前：近藤先生のこと」

陽子「あなたが若い子ばかり手を出すのは  
ね、自分に自信がないからよ。まだ人生経  
験の浅い子なら思うように出来るから、自  
分の薄っぺらさがバレないから」

邦宏「陽子、いい加減にしろよ」

陽子「ああ、最悪。なんでこんな男と結婚し  
たんだろう。何でこんな男と最期を過ごし  
なきやいけなんだろう」

邦宏「そんなに嫌ですか、俺が」

陽子「そうよ！もう愛想尽かしてるの！もうすぐ死ぬって言うのに、何でこんな男に気を遣わなきゃいけないの」

邦宏「分かったよ。出てってやるよ」

宮川「大葉っ」

邦宏「二度とくるもんか！」

陽子「こっちから願い下げよ！二度と来る

な！気持ち悪い！」

邦宏、出て行く。

陽子、ぐったりする。荒く息をしている。目を閉じて呼吸を整えている。

宮川、ほっとけず、そのまま病室にいる。

○同・駐車場へ邦宏の車・車内（夜）

邦宏、車に乗る。

邦宏「くそっ、くそっ、くそっ」

ハンドルの叩く。

携帯が鳴る。『宮川から電話』の表示。

電源から切る。車を走らせる。

○ショッピングモール・駐車場（朝）

運転席に座る邦宏。遠くの山の合間から朝日が昇ってくる。

それをぼーっと眺める。

大きなため息を付き、エンジンをかける。車を出す。

○東町総合病院・外観（朝）

○同・廊下／病室・個室（朝）

邦宏、重い足取りで歩く。個室に近づくにつれて慌ただしい。病室に入ると、陽子が危篤状態。心臓マッサージを受けている。混乱している病室。

邦宏「陽子…？」

宮川「お前、どこ行ってたんだよ！何度も電話したんだぞ！」

宮川、邦宏に掴みかかる。

邦宏「……」

騒然とする中、モニター心電図からピ  
ーと音。

○葬儀場・外観

『大葉陽子 葬儀式場』の看板。

○同・場内

喪服姿の邦宏。祭壇の近くで、淡々と  
喪主をしている。

○火葬場・火葬室

お骨を骨壺にいれている邦宏、家族、  
友人たち。その中に宮川。

○同・駐車場

骨壺を抱えて、車を待っている邦宏。  
その隣には宮川。

宮川「…大丈夫か」

邦宏「…え？」



宮川「一人で帰れるか？思い出が詰まった家だから：きついだろう。一緒に行くか？」

邦宏「一人で大丈夫だ」

宮川「そうか」

邦宏「俺：全然泣けないんだ」

宮川「：まだ受け止められないよな」

邦宏「そうじゃなくて：悲しくないんだよ、

俺。あんな別れ方して：、陽子のこと：全く愛せないんだ。気持ちがスパンと切れて：。何でだろう：一緒に暮らした家族なのに：」

宮川「：：：」

邦宏「俺って最低だろう」

宮川「ノーコメント」

### ○大葉家・外観

門前で待っている七海。

そこに骨壺を抱えて帰ってくる邦宏。

邦宏「：山口」

七海、会釈する。

○同・リビングダイニング

先に入る邦宏。続く七海。

邦宏、仏壇がないので臨時の場所に骨壺を置く。

邦宏「適当に座ってくれ」

七海、骨壺に手を合わせる。邦宏、お茶の準備をしながら、七海を目で追う。  
お茶を出す。

二人ともダイニングに座る。

邦宏「どうぞ」

七海、会釈する。

邦宏「どうした今日は」

七海「……あの、これ」

七海、鞆から日記を出す。

七海「やっぱり先生に渡した方がいいと思っ  
て」

邦宏「うん？何だ」

七海「陽子先生の日記です」

邦宏「陽子の？」

七海「私が預かってました」

邦宏「何で山口か？それも陽子先生って…」

七海「陽子先生は弟の担任なんです。うち、お母さんいないから、何かと気にかけてくれて。本当によくしてもらったんです」

邦宏「…山口の弟は、たつくん？」

七海、頷く。

邦宏「じゃ陽子の浮気相手…」

七海「違います。陽子先生は浮気なんてしてません。全部嘘なの」

邦宏「どう言うことだ、嘘って」

七海「これを読めば分かります」

邦宏、日記に目を通す。

陽子の声「七海ちゃんとお店の協力で、浮気現場を目撃させるのに成功！」

× × ×

(回想) コンビニ・店内事務所

コンビニ店長に謝っている邦宏。

奥の椅子に座っている七海。

× × ×

(回想) ラブホテル街

入って行く男性と陽子。

それを見ている邦宏。

陽子の声「あの人の顔ったら。まだ私も愛さ  
れているのかな、って自惚れてみたり」

× × ×

（回想）大葉家・寝室

クローゼットの中を家探している邦宏。  
そこに入って来る陽子。邦宏、手に持  
っていた下着を慌てて仕舞っている。

陽子の声「どうやら浮気の証拠を探している  
みたい。よかったまだ入院セット作ってな  
くて。計画バレちゃうところだった」

× × ×

（回想）同・リビングダイニング

邦宏、携帯のロックを試している。そ  
の後ろ姿を見ている陽子。

陽子の声「ロック解除、惜しい！番号はね、  
二人が出会った日。0528でした。それ  
にしても困った。これでは中を見てもらえ  
ない……」

○同・同

ダイニングに座っている邦宏、七海。

邦宏「これ：どういう事？協力って：」

七海「陽子先生、もう残り時間が少ないって分かった時、一番に心配したのは先生のことなんだって」

邦宏「俺？」

七海「私が死んだ後、私のことなんか気にせず、おもいっきり幸せになって欲しい。近藤先生と幸せになって欲しい。そのためには私のこと、徹底的に嫌いにさせなきゃいけないから協力して欲しいって」

邦宏「なんだよそれ：」

七海「死ぬ前に、どうしてもしたいことだからって」

邦宏「…：…：」

七海「そんな風に頼まれたら断れないよ：でも陽子先生、何も悪いことしてないのにっ、このままじゃかわいそすぎる」

邦宏「山口：」

七海「私、黙ってられなかった。すみません」

邦宏「いや：ありがとう。教えてくれて」

七海、席を立つ。目礼して出て行く。

邦宏、日記のページをめくる。

愛情が溢れた言葉が続く。

文字はどんどん弱弱しくなり、乱れていく。筆圧も弱くなっている。

陽子の声「ふふ私の作戦はうまく行きそう。

本当はあんなこと言いたくなかったんだけど：本心じゃないの、ごめんね。でもこれで大丈夫。あの人の再スタートのためだもの。うまく行って欲しいな。近藤先生、ちゃんとあの人を愛してくれるかな。愛してくれるといいな。甘えん坊の寂しがり屋さんだから」

さらにページをめくると、

『私が向こうにいく前にしたいこと』

『邦宏さんにちゃんと嫌われて、忘れ

てもらおうこと』

と書いてある。

邦宏、嗚咽が漏れる。背中が小さく震える。

○徳福探偵事務所・応接室

向かい合って座っている宮川、邦宏。

邦宏「騒がせて悪かった」

宮川「…陽子ちゃんらしいな。自分のことよりお前のこと考えて逝くなんて」

邦宏「ああ」

宮川「お前にはもつたいない。いい嫁さんだ」

邦宏「俺もそう思う。だからちゃんとしないとな。俺、陽子に恥じない生き方するわ」

宮川「…何か困ったことあったら相談しろ」

穏やかな笑顔の邦宏。

○若生中学校・教員専用駐車場

校舎の死角。

そこで立ち話をしている邦宏、里奈。

邦宏「ごめん」

里奈「奥さんが亡くなられて今はそうかもし

れないけど、少し時間が経てば：」

邦宏「俺は妻一筋にすることにしたんだ」

邦宏、ネックレスに通した陽子の結婚

指輪を見せる。

里奈「…何で？何でよ…これでやっと…結婚

出来ると思ったのにつ！」

邦宏「ごめん」

二人を影から見ている七海。手には携帯を握りしめている。

里奈「邦さん」

邦宏「俺みたいなおじさんじゃなくて、若くていい奴がいるよ。里奈にはもつと素敵な

出会いがあるから。あ、岡田はどう？」

里奈「バカ！」

里奈、邦宏を叩く。里奈、走って去る。

ぼつんと立っている邦宏。

七海、それを見てガッツポーズをとる。

七海「陽子先生、全部：全部上手くいった

よ！」

七海、携帯の画面に向かって話す。



画面には、陽子からのメール。

『とうとう言えた！すっきりした〜。思ってること全部言った！ずーっと我慢してたこと全部言えたの。計画は順調です。ありがとう』  
と表示されている。

○（回想）ファーストフード・店内

ジュースを飲んで、七海、拓海、

陽子。笑顔の陽子。

陽子「私が向こうにいく前にしたいことはね、私のことを絶対忘れさせないこと。罪悪感でがんじがらめにするの。私が死んだ後、あの人だけ幸せになんてさせない。あの女と幸せになるなんて絶対許せない」

× × ×

（フラッシュ）産婦人科・ロビー

疲れ切った暗い顔で座っている邦宏、  
陽子。

ロビー、妊婦さんや、赤ちゃん連れの人

家族。その幸せそうな顔を見て、

邦宏「ああもうあんな姿は望めないんだ…」

陽子「……」

邦宏「もうちよつと陽子がなあ、若かったら

なあ」

傷付く陽子。拳をぎゅつと握る。

× × ×

(フラッシュ)大葉家・リビングダイニング

テーブルに並べた二人分の食事。

陽子が一人で座っている。時計の針が

大きく響く。陽子、ため息。

× × ×

(フラッシュ)東町総合病院・診察室

陽子「…転移ですか」

医師「治療方針をどうされるのか、ご家族の

方とよく相談して下さい。時間は限られて

ます」

陽子、呆然としている。

× × ×

(フラッシュ)若生中学校・教員専用駐車場

同日。

陽子、フラフラとした足取り。

邦宏を見つける。

陽子「あなた：」

陽子、声をかけようとする、里奈、

邦宏に後ろから近付く。抱きしめる。

邦宏、驚き、拒否のポーズをとっているが、すぐ受け入れて、いちやつき、キスをする。

陽子「……」

陽子、バックを持つ拳に力が入る。全身、怒りで震えている。

○（回想）ファーストフード・店内

ジュースを飲んでいる、七海、拓海、

陽子。

七海「私、陽子先生のためなら何でもする」

陽子「ごめんね」

七海「ほらまた謝る。私から協力したいって言ったんだよ？気にしないの」

陽子「ありがとう」

穏やかな、陽子と七海。

○若生中学校・教員専用駐車場

顔を上げて、空を見上げている邦宏。

それを見て頬えむ七海。そのまま去る。

邦宏「陽子、俺はおまえにふさわしい男に近

付いてるか……。なあ、見ててくれよ。俺、

頑張るからな」

邦宏、陽子の結婚指輪を触りながら、

切なそうに空を見続けている。